

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：41503

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520547

研究課題名（和文） 初級日本語学習者の自主的教室外活動を支援するアーカイブ型教材システムの開発と運用

研究課題名（英文） The Development and use of the archive system to support independent activities outside the classroom by beginner level students of Japanese.

研究代表者

澤 恩嬉 (SAWA EUNHEE)

東北文教大学短期大学部・総合文化学科・准教授

研究者番号：50389699

研究成果の概要（和文）：本研究では、来日まもない初級日本語学習者の教室外活動を支援すべく、自らの体験を通じて得た情報を記録・蓄積し、学習者同士が共有できる、学習者主導のアーカイブ型システム教材を開発した。学習者の体験を日記形式に記録し参照できるブログ型のシステムに加え、リアルタイムで情報交換が行える SNS ツールを併用することや支援者であり仲間としての日本語母語話者が加わることによって、より効果的な活用が期待できる。

研究成果の概要（英文）：This research is for people who are studying Japanese at a beginner level. We have developed a systemic textbook and looked for effective operating methods to study Japanese, through learners' sharing of information derived from their own studying and experience. It is learner driven and exponential. We can expect more effective results by using blogs which learner's type as a form of daily journal on their experiences, and SNS tools by which they exchange information in real time. Adding native Japanese to this program as friends or supporters, would make this system even more effective.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：教室外活動支援、学習者主導、アーカイブ型教材、教室外活動

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初は、「生活者としての外国人」のための日本語教育に目が向けられ、地域における外国人への日本語支援のあり方や支援方法について調査・実践報告が数多くなされていた（2009 日本語普及協会）。生活者としての外国人とは、地域に

生活の基盤をおく定住型外国人のみならず、大学機関等で学ぶ留学生や就学生も同じく地域社会の一員としてこれに含まれる。中でも来日まもない初級日本語学習者の場合、日本語学習支援と同時に生活支援を必要とされることが多く、学習者がスムーズに地域社会に馴染めるように手助けをすること

も受け入れ教育機関の責務として求められていた。

(1) 教師主導型活動の限界と課題

このような状況の中、東北文教大学短期大学部留学生別科では、学習者への日本語学習支援および生活支援を同時に行うことを目的に、平成17年度より初級日本語学習者に対し、教室外活動を言語面、言語以外の面において支援してきた。平成19年度からは、科学研究費の助成を受け、学習者の教室外活動を記録することが可能となり、学習者の教室外における活動の実態を把握することができた。その結果、日本語能力や教室外活動に対する不安の度合いによって教室内での指導法を変え、活動を行ってきた。しかし一方では、学習者の学習スタイルの多様化による、教師主導型活動の限界も課題として明らかになった。教師主導型の活動では、教師側の活動に対する信念と学習者側の信念がうまくかみ合わなければ、学習効果は期待できない。特に、活動に必要な情報のうち、語彙や表現などの言語的要素は教師が支援できたとしても、言語以外の要素、特に社会文化的な要素においては、教師主導では学習者の信念との衝突を免れられないのが現実であった。

(2) 初級日本語学習者の協同学習の課題

学習者同士が話し合いなどを通じて学び合う協同学習は、近年学習者主体の学習方法の一つとして重要性が再認識され、その学習効果が検証されている。保坂他(2004)では、学習者同士のインターアクションによって、言語的な知識の蓄積だけでなく、言語以外のことについても知識の構築や共有化、そして多様な視点の取得が観察されたと報告している。しかし一方で、学習者中心のこのような活動は、学習者同士の普段からの人間関係が少なからず関係してお

り、学習にも影響を及ぼしている。また、初級日本語学習者の場合、学習者の言語的リソースが不足しているため、学習者同士の話し合いによる活動はほぼ不可能に近いことが課題であった。

2. 研究の目的

本研究は、来日まもない初級日本語学習者が教室外活動を行うために自主的に情報収集を行い、また自らの体験を通して得た様々な情報や気づきを記録・蓄積することにより、同じ学習者同士が共有できる、学習者主導のアーカイブ型教材の開発とその効果的な活用法を探ることを目的としている。具体的には以下の二つである。

(1) 学習者主導の自主的な活動および自己評価

本研究は、教師主導型活動の課題から、学習者自ら情報収集を行い、活動を振り返り、記録できる、学習者主導の教材を作成する。学習者同士が情報を共有することで、自分のコミュニケーション活動を客観的に自己評価できるようにすることを目的とする。

(2) 学習者同士の情報共有による学び合い

本研究では、学習者自らの活動記録による情報の共有を行うことで、人間関係などを意識せず、必要な情報を入手し、提供することができるようにする。また、学習者の母語による記録も可能にし、翻訳支援を行うことで、日本語能力の差に関わらず学び合いに参加できるようにする。特に学習者の言語以外の部分での情報発信が大いに期待できる。

3. 研究の方法

22年度は、試作版教材を作成した。学習者は共有サーバーを介して教室外活動を行うための情報収集を行い、活動によって得られた新たな情報は、学習者同士が共有で

きるように記録し、蓄積していくようにした。学習者の母語による情報は WEB サーバーを介して翻訳支援し、学習者同士が情報を共有できるようにした。

23 年度以降は、試作版の活用状況の分析を行い、その反省を踏まえ、より効果的な活用を目指して検討・改善を進めた。学習者の活動の評価に関しては、学習者自身が段階的に目標を設定し、活動を行えるよう、ポートフォリオ記録による自己評価を試みた。また、学習者へのアンケートの分析結果や談話データを通して教材の有効性を検証した。

4. 研究成果

本研究で開発を試みた、アーカイブ型システム教材の有効性および効果的な運用について、以下の3つまとめることができる。

(1) 学習者のポートフォリオとしての役割

学習者には、毎回の活動記録のほかに、年に3回に渡って「これまで一人で日本語を使って行った活動内容」と「これから日本語使ってやってみたい、できるようになりたい活動内容」についてアンケートを実施した。

その結果、初級学習者の傾向としては、来日直後は日本語学習に対する抽象的な目標を持っていることが多いが、学習が進み、日本でのさまざまな活動を経験することで、具体的な目標と活動に対する自己分析ができるようになっていた。

このことから、初級日本語学習者は、できるだけ早いうちから、自分に必要な活動を自ら計画し、さまざまな経験を段階的にこなしていくことで、自律した日本での生活や日本語学習への動機付けになると考える。

(2) 学習者のニーズに合った情報共有手段としての役割

本研究の開始1年目は、学習者が収集した情報を記録し共有していくことを目的としたブログ型のシステム教材を作成した。

従来の情報を一方的に受け取ることを目的とした生活支援のためのホームページとは異なり、学習者が自分の活動を日記形式に記録していくことができ、学習者同士が自由に交流できる場としての役割を担うことが目的でもあった。ところが、本研究の開始後からスマートフォンの普及が本格的に始まり、学習者同士がいつでもどこでもネットを通じて情報共有が可能になってきた。本研究では、このような学習者の生活環境の変化に合わせ、ブログ型のシステムに加え、学習者が手軽にアクセス可能な SNS ツールを併用することで、学習者ができるだけ活動内容を記録しやすいように工夫した。また、スマートフォンのインスタントメッセージアプリを使い、普段から学習者同士、または学習支援者との交流を活発に行うようにし、学習者が必要な時に情報を交換できるような環境を構築した。

(3) システムの効果的な運用のための支援者の役割

ブログ型のシステムが学習者の活動記録であり、情報共有の場であるのに対し、学習者が SNS ツールなどを用いてコミュニケーションを行う目的は、情報を得るだけでなく、仲間同士の交流を一番強く意識している。交流を目的としたやりとりの際には、同じ母語の学習者同士であっても日本語を使う場面を多くみられた。

次に、学習者が自主的に行う SNS 上でのやりとりの中に日本語母語話者が加わった場合も仲間同士の交流が主な目的としてやりとりが行われることが多い。しかし、やりとりの中には、学習者が自分の言語リソースの不足を補うために、日

本語母語話者へ援助を求めるケースも多くみられた。また、学習者の発話意図が明確ではなく、確認が必要な時や明らかに誤用と見られる語彙、文法の選択の際には、日本語母語話者からの訂正や確認が行われることもあった。コミュニケーションの場としてのやりとりから、学習の場としてのやりとりに移り変わる例がいくつも観察された。

以上のことから、SNS 学習者が形成するネットワークの中に良き仲間であり、支援者の役割を同時に担う日本語母語話者との関係作りができれば、より効果的な学習ストラテジーとしてシステムの運用が可能になる。

【参考文献】

保坂敏子・奥原淳子 (2004) 「学習者同士のインターアクションにおける学びの実態」、『小出記念日本語教育研究会 論文集 12』, pp.41-62.

後藤典子・澤恩嬉・渡辺文生・山上龍子 (2007) 「個人プロジェクトワークにおける学習者の気づきを促すためのフィードバックの試み—教室外の言語活動環境を構築するために—」『日本語教育方法研究会誌』 14,2,pp30-31.

澤恩嬉・後藤典子・渡辺文生・山上龍子 (2008) 「初級日本語学習者の教室外活動を支援するための教室内指導—電話による問い合わせ・依頼の場面を中心に—」『日本語教育方法研究会誌』 15,2,pp.2-3.

(社) 国際日本語普及協会 (2009) 『学習者参加型カリキュラムの開発—『リソース型生活日本語』の発展的活用を目指して—』平成 20 年度文化庁日本語教育研究委嘱「生活者としての外国人」のため

の日本語教育事業, 外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発報告書

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 (計 3 件)

①澤恩嬉・後藤典子・渡辺文生・山上龍子

「初級日本語学習者の自主的教室外活動を目指したポートフォリオの導入について—学習者の目標設定と自己評価の観点から—」『日本語教育方法研究会誌』 査読有、18 巻、2011、56-57.

②澤恩嬉「接触場面におけるカタログ請求の電話の縦断的研究—その日本語教育への応用—」『接触場面の言語管理研究』 査読無、9 巻、2011、27-40.

③澤恩嬉・渡辺文生「SNS ツールを用いた学習ストラテジーの有効性について —SNS 上での情報のやりとりを中心に—」『日本語教育方法研究会誌』 査読有、19 巻、2012、24-25.

〔学会発表〕 (計 2 件)

①澤恩嬉「SNS ツールを用いた学習ストラテジーの有効性について —SNS 上での情報のやりとりを中心に—」第 39 回日本語教育方法研究会、2012 年 9 月 15 日、石川県政記念しいのき迎賓館(金沢大学)

②澤恩嬉「日本語母語話者と非母語話者の SNS グループチャットの分析」第 5 回談話コロキウム、2012 年、12 月 22 日、山形テルサ

〔その他〕

ホームページ等

<http://bk-tbunkyo.com/blogs/wp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤 恩嬉 (SAWA EUNHEE)
東北文教大学短期大学部・総合文化学
科・准教授
研究者番号：50389699

(2) 研究分担者

渡辺 文生 (WATANABE HUMIO)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：00212324

依田 平 (YODA TAIRA)
東北文教大学短期大学部・総合文化学
科・准教授
研究者番号：00369295

後藤 典子 (GOTO NORIKO)
東北文教大学短期大学部・総合文化学
科・准教授
研究者番号：50369295

山上 龍子 (YAMAKAMI RYUKO)
東北文教大学短期大学部・非常勤講師
研究者番号：90461722